

学位論文題名

Phases and Their Linguistic Forms

(局面とその言語形式)

学位論文内容の要旨

本論文は、認知文法の枠組みを用いて局面 (phase) 及びそれを指示する言語形式の分析を行なおうとするもので、局面という語は、動詞が表わす状況の「始まり (inception)」, 「終わり (termination)」を指す用語として用いられる。本論文は大きくわけてつぎの二点を目的とする。第一に、ある言語において、あるいは言語の差異を超えて、「始まり」を指示する局面動詞 (以下、始動相の局面動詞 (inceptive phasic verb) と呼ぶ) が共有する概念化／意味、「終わり」を指示する局面動詞 (以下、終動相の局面動詞 (terminative phasic verb) と呼ぶ) が共有する概念化／意味、それぞれを抽出し、如何なる概念化／意味が言語において局面と見做されているかを明らかにすること、第二に、個々の局面動詞の意味の違いを明るみに出し、その違いから単一の言語に複数の始動相の局面動詞が存在する理由を説明することである。

第1章では、「相 (aspect)」と呼ばれる言語現象一般を概観し、本論文の研究対象である「局面とそれを指示する言語形式」がそれらの現象全体の中で占める位置を明確にする。その上で、局面及びそれを指示する言語形式に関する先行研究を概観し、それらの問題点を指摘する。

第2章では、本論文が依拠する認知文法を概説する。この章の前半では、本研究に直接関わる幾つかの概念について説明する。後半では、本研究にとって重要な「エネルギーの行使を伴う関係 (energetic relation)」と「ある存在の出現と消失 (an entity's coming into and going out of existence)」という二つの概念を導入する。

第3章では、英語の局面動詞である start, begin, stop, finish, quit, cease の意味記述を行い、その意味記述から英語において局面と見做される概念化を抽出する。この章では、始動相、終動相それぞれの局面動詞の意味的な相違点よりも類似点に焦点を置き、英語における「始まり」「終わり」の特徴づけがなされる。start, begin は本動詞として「ある存在の出現」を指示する表現であり、これらの動詞の局面動詞としての用法は、その様な存在が「エネルギーの行使を伴う持続的な関係 (energetic and durational relation)」となる場合として分析される。また、stop, finish, quit, cease は本動詞として「ある存在の消失」を指示する表現であり、これらの動詞の局面動詞としての用法も、その様な存在が「エネルギーの行使を伴う持続的な関係」となる場合として記述される。このことから、「始まり」、「終わり」の局面は、それぞれ「エネルギーの行使を伴う持続的な関係の出現」、

「エネルギーの行使を伴う持続的な関係の消失」として特徴づけられる。

第4章では、アイヌ語に関して、第3章での英語と同様に、局面動詞の意味記述と局面という概念の抽出、一般化を行なう。アイヌ語の局面動詞として *oasi*, *okere*, *isam* を扱う。アイヌ語に関して得られた一般化は、第3章で英語に関して得られた局面と局面動詞の特徴づけと照らし合わせて比較検討される。

第5章では、日本語の局面動詞として、*hajime-ru*, *das-u*, *yam-u*, *age-ru*, *oe-ru*, *shima-u* の意味記述を行い、それらの意味記述から日本語において局面と見做される概念化を一般化する。得られた一般化は、更に英語における局面及び局面動詞の特徴づけと照らし合わせて比較検討される。

第6章では、韓国語の局面動詞、*sijaha-da*, *mal-da*, *chiu-da*, *beori-da*, *nae-da* の意味記述を行い、それに基づいて韓国語で局面と見做される概念化を抽出する。引き出された一般化は英語に関する一般化と比較される。

これらの三つの章では、アイヌ語、日本語、韓国語においても、英語においてと同様に、始動相の局面動詞として用いられる表現は「ある存在の出現」を指示する表現であり、また終動相の局面動詞として用いられる表現は「ある存在の消失」を指示する表現であり、どちらの場合も局面動詞としての用法は、その様な存在が「エネルギーの行使を伴う持続的な関係」となる特定の場合として記述される。

第7章では、局面とそれを指示する言語形式に関して言語の差異を超えて見られる性質を明らかにする。この章の前半では、言語の差異を超えて妥当な形で局面という概念の定義を試みる。その結果、「始まり」の局面には「エネルギーの行使を伴う持続的な関係の出現」という、「終わり」の局面には「エネルギーの行使を伴う持続的な関係の消失」という定義が得られる。更に、多くの言語で「上がること」、「出ること」、「離れること」という三つの基本概念のいずれかを中心的な意味として含む表現が局面を指示する言語形式として用いられることを指摘し、得られた局面の定義を用いてその動機付けを試みる。ここでは、言語の別無く、人間が経験する具体的な出来事としての「上がること」、「出ること」、「離れること」には典型的に「ある存在の出現ないし消失」が伴うために、観察されるような概念的結びつきが起こるのだという考えが提案される。章の後半では、同一の局面を指示する局面動詞間の意味的差異を「前提と含意 (presupposition and entailment)」、「突発性と意外性 (abruptness and unexpectedness)」、「使役性 (causativity)」、「意志性と操作性 (volitionality and controllability)」という概念を用いて説明し、単一の言語に複数の始動相局面動詞、複数の終動相局面動詞が存在する理由を示唆する。局面動詞として用いられる表現は、局面を指示するのみに留まらず、これらの概念の有る無しに応じて様々な状況を伝える重要な役割を持つために、一つの局面を指示する表現が複数存在するのだという見解が述べられる。

第8章では、本研究で明らかになったことを纏め、それらが将来の研究に対してどんな意味を持つかを考察する。過去の研究に対してもつ意味として、第1章の最後で指摘した先行研究の問題点に対して解答が提案されている。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 葛 西 清 蔵

副 査 教 授 高 橋 英 光

副 査 教 授 植 木 迪 子

副 査 助 教 授 清 水 誠

学 位 論 文 題 名

Phases and Their Linguistic Forms

(局面とその言語形式)

本論文は「局面」(Phase)という出来事の始まりと終わりという言語の相(aspect)を系統の異なる言語がどのように表現しているのか、すべての言語に普遍的なものがあるのかどうか、あるとすればそれはどのようなものか、という問題にひとつの答えを提供するものである。局面に限らず言語の「相」とはあくまでも人間が頭の中でさまざまな出来事、経験を切り取るその切り取り方の問題であって、自然界に客観的に存在するものではない。この点で言語によるコミュニケーションにとって最も重要な問題のひとつに数えられている。局面という問題は単に局面だけを観察しても研究することができない。あくまでも動詞そして文構造全体との関連を考慮しなければならない。井筒氏は英語をはじめ日本語、アイヌ語、韓国語という4種の異なる言語を研究対象として局面を表わす動詞の実用例を豊富に集めて入念な検討を加えている。その結果「はじまり」(inception)とは「動的で持続的な関係が特定の場面に出現する変化」、また「終わり」(termination)とは「動的で持続的な関係が特定の場面から消滅し、典型的にはその結果新しい実体が登場したり消滅する変化」という普遍的な特徴づけをするに至っている。

以前から「相」の研究には非常に優れた研究が多々あるが、意味を形式論理的な真偽条件の問題として扱う傾向が強く人間の認知の考察が十分ではなかった。その結果例外とされる現象を扱うのに場当たりの説明をする難点があった。井筒氏は多くの実例を集めた結果、互いに系統の違う言語でもある程度普遍的に局面を表わす動詞とは動作動詞が使われやすいこと、状態動詞は使われにくいこと、しかし状態動詞が使われる例外的な場合もあることを突き止め、これらの一見相反する事実がどのような原理に基づいているのかを人間の認知の仕方にまで掘り下げて解明するに至っている。この点は本論文の最も大きな学問的貢献と言える。また本研究には随所にすぐれた洞察が観察され、

たとえば多くの言語で「はじまり」よりも「終わり」を扱う表現が多い事実もそのひとつである。

本論文は記述的研究であると同時に理論的研究とも位置づけられる。英語学研究であると同時に言語学研究とも位置づけることができる。局面という言語現象の記述的研究としても十分読みごたえがあると同時に、言語理論の新しいパラダイムである認知言語学（1980年代から急速に発展しつつある言語理論）の研究としても読みごたえのあるものになっている。著者は沢山の図示を使い極力平明な英語で論証する努力をしている。文章については徹底したネイティブチェックを行っており全部で405頁に及ぶ英文は概ね明晰であり、文法、文体上の誤りは極めて少ない。

従来 of 言語学研究はともすれば記述的研究の場合は記述に片寄り理論的な考察がおろそかになりがちであった。逆に理論的研究の場合は理論に片寄り記述的データが貧しくなりがちであった。本研究は記述的側面と理論的側面の釣合が非常に優れていることが審査委員全員一致して高く評価された。

無論改良すべき点がないわけではない。例えば一部日本語の例文の適格性の判定についてはより客観的な調査が望まれるし、また著者自身認めるように今回の研究の後半で浮上してきた幾つかの新しい問題――例えば何故様々な言語で「はじまり」よりも「終わり」の方が表現形式の数が多くて複雑なのか――などは今後の課題として残っている。しかし全体として調査内容も英文も十分国際的水準に達していることから審査委員会としては本論文は博士(文学)を授与するにふさわしいものであるとの結論に達した。